

第11回シェイクスピア・ワークショップ

メンバー： 遠藤 玲奈 （青山学院大学大学院・博士前期課程）
小林 葵 （お茶の水女子大学大学院・博士前期課程）
司会： 小林 葵
コメンテーター：佐野 隆弥 （筑波大学教授）
末廣 幹 （専修大学教授）

（要旨）

第11回シェイクスピア・ワークショップが2016年10月9日（日）、慶應義塾大学にて開催されました。コメンテーターに筑波大学教授の佐野隆弥先生と専修大学教授の末廣幹先生をお迎えし、2人のメンバーによる研究発表とディスカッションを行いました。今回で最後となりましたこのワークショップは、それぞれが研究対象としている作品の解釈やアプローチについて意見交換でき、今後の研究の方針を考える上で大きな足掛かりとなりました。

遠藤は『夏の夜の夢』における宮廷祝宴係と職人たちの役割」という題目で、『夏の夜の夢』に登場する祝宴係のフィロストレイトと職人たちの関係を、実際のエリザベス朝演劇における祝宴係と職人の役割に注目して論を立てました。『夏の夜の夢』において、公爵の結婚式で上演される劇を手配する役割を持っているのが、王室祝典局長のフィロストレイトです。祝宴係は貴族のために上演する劇の内容を決めたり、準備を取り仕切ったりすることが仕事でした。シェイクスピアの時代に実在した祝典局長エドモンド・ティルニーの役割と、フィロストレイトが劇中で見せる仕事を比較し、現実なら検閲で通らないような芝居も劇中では受け入れられることを指摘しました。実際のエリザベス朝演劇における職人も、貴族のために上演する演劇に携わっていましたが、劇中と異なる点として、職人は役者ではなく制作する立場として関わっていたことが挙げられます。本発表では、6人いる職人のうち大工のクウィンスと指物師のスナッグに焦点を当てて論じました。実際の大工は、木材の板や釘を使って芝居に必要なものを制作することが仕事でしたが、劇中のクウィンスは芝居に必要な石堀を作りません。指物師のスナッグは、名前や職業からはコンパクトな体型だと考えられますが、彼が劇中劇で演じるのはライオンの役です。このようなミスマッチが笑いを引き起こし、実在の職人たちでは叶わなかった夢をシェイクスピアは劇中で見せたかったのだとまとめました。

小林は「暴力に立ち向かうこと：All's Well That Ends Well の場合」というテーマで、当問題劇のテキスト内における言葉の暴力を、クイア理論家のジュディス・バトラーの論を用いて考察しました。主人公ヘレナと彼女のベッドトリックに協力するダイアナは、異性愛主義の規範、人種的、そして女性という枠組みの中に留まることを強いる暴力に直面しますが、それぞれその力に屈することのない存在感を示すことに成功していると

分析しました。ロシリオン伯爵家の息子・バートラムに恋するヘレナは、彼に一方的に婚約を破棄され、また彼の従者からも受け身的な女性という立場を受け入れるようにという言葉が浴びせられますが、その暴言の持つ文脈を自身に有利になるように新しく置き換えることでその暴力を覆せることを示しています。一方彼女の代理人のダイアナは、ヘレナの計画通りバートラムの不正を追及する際に、彼に娼婦に仕立て上げられそうになりますが、その決めつけを否定して暴力的な曲解には枠づけられない彼女の存在と個人性を示すことにより、その暴力に対抗し、お互いを排除することのないヘレナとの開かれた連帯を築き上げています。これら作中の場面をバトラーの考察と比較検討し、暴力とはその受け手を抑圧的な枠組みにはめ込もうとすること、そしてその暴力に立ち向かうことはその力を否定し、その強制力によってはとらえられない多様な存在であることを示すものであると考えを進めました。ヘレナとダイアナはそれぞれ暴力的な決めつけを否定し、彼女たちの声を表現することでその暴力に対抗できる可能性を示していると結論付けました。

今回のワークショップでは参加メンバーが二人と少数でしたが、お互いのアプローチや論点を尊重し、意見交換を進める中でそれぞれの歴史的・現代的な視点からの考察を本番を迎えるまで深めていくことができたように思います。作品への理解を深めることや先行研究及び理論書を読み込むことなどそれぞれの課題も見つかり、今後の方向性を認識することができました。お互いの違った視点からの意見を取り入れて研究を進めていくことは、より伝わりやすい表現を心掛け、また着地点を見据えた上で分かりやすい論を展開することの大切さに気が付くことにつながったので、これらの点についてはこれからも忘れずに意識していきたいと思います。

最後になりましたが、当日フロアには多くの方々にお越しいただきました。ワークショップ後、個々にお声をかけて下さった方もいらっしやり、温かいお言葉や発表のご感想、文献に関する情報等をいただきました。ありがとうございました。また、今回のワークショップ立ち上げからお世話になりました石橋敬太郎先生、ワークショップ担当委員の阿部曜子先生、山田雄三先生、清水徹郎先生、コメンテーターの佐野隆弥先生と末廣幹先生、そしてワークショップにご参加下さいました全ての皆様に、メンバー一同改めて御礼申し上げます。最後のワークショップにて、大変貴重な機会を賜りました。同じ英文学研究に取り組む仲間と共に歩んできたことは、今後の研究に対する励みとなりました。これからも研究活動に精進して参ります。

(文責：小林葵、遠藤玲奈)

